

漢語福清方言の使役構文
— “共” を用いた構文を中心に —
神戸市外国語大学大学院 陳 学雄

1. はじめに

漢語福清方言(以下福清方言と呼ぶ)は中国福建省東南沿岸地域の福清市及び平潭県の一部で用いられ、福州方言を代表とする漢語閩東方言の変種として系統づけられる。

福清方言に関する先行研究はわずかであり、また音韻研究が中心であった。文法の記述研究は非常に乏しく、使役構文に関する研究に至っては管見の限りまだない。本発表の目的は福清方言の使役構文、特に“共”を用いた使役構文を中心に、その構造を明らかにすることである。

福清方言では、一般的に統語的な手段を用いて、使役を表す。「使役者+使役標識+被使役者+VP(動詞句)」のような構文を取る。ただし、使役標識の差異により解釈が異なる。具体的に/ $kœ^{21}$ / “叫”、/ hau^{43} / “吼” で指示使役を、/ $lyŋ^{42}$ / “让”、/ $tɔ^{44}$ / “掏” で容認使役を、/ $kaŋ^{51}$ / “口” で強制使役を表す。このほか、/ $kœŋ^{42}$ / “共” が使役標識として用いられる使役構文も存在する。

本発表では上記の各使役標識の特徴を具体例とともに記述する。その上で、“共”を用いた使役構文が他の使役構文との相違点を明らかにする。さらに、その違いが生じたのは、“共”が文法化の後、同伴者、動作の相手、ないし受益者などを標示する多機能性を持つ標識に変化したからであると主張する。

2. 福清方言の使役構文

福清方言の使役構文は「使役者+使役標識+被使役者+VP(動詞句)」の構造をとる。使役標識の違いによって、指示使役、容認使役と強制使役などの表現が構成される。

2.1 指示使役: / $kœ^{21}$ / “叫”、/ hau^{43} / “吼”

福清方言では、/ $kœ^{21}$ / “叫” や/ hau^{43} / “吼” を用いて、指示使役を表現する。元来、/ $kœ^{21}$ / “叫” は「叫ぶ」を、/ hau^{43} / “吼” は「呼ぶ」を意味する動詞である。(1)に例を示す。

(1) $\eta ua^{43} ne^{43} \{kœ^{21} / hau^{43}\} \eta ua^{43} khyɔ^{21} ni^{44} puŋ^{43} liu^{44} ɔ^{44}$

我 妮 叫 吼 我 去 日本 留学

1SG 母 CAUS CAUS 1SG 行く 日本 留学 「母が私に日本へ留学させた。」

(1)では、使役標識は/ $kœ^{21}$ / “叫” を用いている。/ hau^{43} / “吼” に置き換えても同じ意味を表す。両標識の違いは現段階では明らかでない。

/ $kœ^{21}$ / “叫” または/ hau^{43} / “吼” を用いた使役構文では、いずれも使役者が被使役者に口頭で指示を与えてある行動を起こすように働きかける指示使役の状況を表している。(1)を例に言えば、「母が私に日本に留学する」ように口頭で指示したことである。/ $kœ^{21}$ / “叫” または/ hau^{43} / “吼” を用いた状況では、被使役者の意志の有無は特に重要視されていない。

2.2 容認使役: /lyɔŋ⁴²/ “让”、/tɔ⁴⁴/ “掏”

(1)の標識を/lyɔŋ⁴²/ “让” または/tɔ⁴⁴/ “掏” に置き換えると、被使役者がある行動を起こそうとして、使役者がそれを許可、またはその行動を起こすのを妨げない状況、すなわち容認使役の状況を表す。指示使役との違いは、容認使役では、被使役者の意志(私が日本に留学したがること)が暗示されている。

- (2) ɲua⁴³ nɛ⁴³ {lyɔŋ⁴² / tɔ⁴⁴} ɲua⁴³ khyɔ²¹ ni⁴⁴ puɔŋ⁴³ liu⁴⁴ ɔ⁴⁴
 我 妮 让 掏 我 去 日本 留学
 1SG 母 CAUS CAUS 1SG 行く 日本 留学 「母が私に日本へ留学させた。」

/lyɔŋ⁴²/ “让” は共通語からの借用だと考えられる。その証拠に、許可しないような状況では、/tɔ⁴⁴/ “掏” を用いた(3a)は容認される。一方、/lyɔŋ⁴²/ “让” はまだ福清方言に浸透しておらず、それを用いた(3b)は容認されない。

- (3) a. ɲua⁴³ nɛ⁴³ iŋ⁴⁴ tɔ⁴⁴ ɲua⁴³ khyɔ²¹ ni⁴⁴ puɔŋ⁴³ liu⁴⁴ ɔ⁴⁴
 我 妮 怀 掏 我 去 日本 留学
 1SG 母 NEG CAUS 1SG 行く 日本 留学 「母が私に日本へ留学させてくれない。」
 b. *ɲua⁴³ nɛ⁴³ iŋ⁴⁴ lyɔŋ⁴² ɲua⁴³ khyɔ²¹ ni⁴⁴ puɔŋ⁴³ liu⁴⁴ ɔ⁴⁴
 我 妮 怀 让 我 去 日本 留学
 1SG 母 NEG CAUS 1SG 行く 日本 留学

/tɔ⁴⁴/ “掏” は元来「取る」を意味する動詞である。使役を表すほか、授与を表すこともできる。福清方言では、授与を表す場合には、(4a)と(4b)のような表現が両方存在する。(4a)は授与対象を標示する/khɔ²¹/ “乞” を用いている。(4b)には、さらに授与対象の動作を表す要素(“看”「読む」)が付加されて、「N₁+V₁+N₂+N₃(有性物)+V₂」の構文を取る。

- (4) a. ɲua⁴³ mɛ⁴³ tsy⁵¹ khɔ²¹ ly⁴³
 我 买 书 乞 汝
 1SG 買う 本 与える 2SG 「私はあなたに本を買ってあげる。」
 b. ɲua⁴³ mɛ⁴³ tsy⁵¹ (khɔ²¹) ly⁴³ khaŋ²¹
 我 买 书 (乞) 汝 看
 1SG 買う 本 与える 2SG 読む 「私はあなた(が本を読むため)に買ってあげる。」

(4b)のような構文となると、“我买书汝看”のようにも表現ができ、“乞”の生起が随意的となる。一方、V₁に/tɔ⁴⁴/ “掏” を用いた場合、通常の動詞よりも構文が一個増える。以下の(5)が示すように、動作対象である N₂ を V₂ に後置させ、「N₁+V₁+N₃(有性物)+V₂+N₂」の構文を取ることもできる。

(5) a. ɲua⁴³ tɔ⁴⁴ piŋ⁴⁴ kuɔ⁴³ ly⁴³ sia⁵¹

我 掏 苹果 汝 食

1SG 取る リンゴ 2SG 食べる

「私はリンゴを取ってきて食べさせる。」

b. ɲua⁴³ tɔ⁴⁴ ly⁴³ sia⁵¹ piŋ⁴⁴ kuɔ⁴³

我 掏 汝 食 苹果

1SG 取る 2SG 食べる リンゴ

「私はリンゴを食べさせる。」

(5a)は「ものの授与」であるのに対して、(5b)は「リンゴを食べること」のように、「ことの授与」である。(5a)から(5b)の構文が発展したことによって、授与対象にある事態を行う機会を授与することによって、容認使役の解釈が発生する。同時に、/tɔ⁴⁴/ “掏” の原義である「取る」という意味が完全に消失している。それに加え、N₂が後置することによって、以下の(6)で示すように、N₂は“掏”の対象になりにくいものでも表現できる。(6)は「北京に行く」機会を授与することによって、容認使役のような状況が生み出されている。

(6) ɲua⁴³ tɔ⁴⁴ ly⁴³ khyɔ²¹ pe²⁴⁴ kiŋ⁵¹

我 掏 汝 去 北京

1SG 取る 2SG 行く 北京

「私はあなたに北京に行かせる。」

2.3 強制使役 : /kaŋ⁵¹/ “□”

使役標識は/kaŋ⁵¹/ “□”¹(対応する漢字は不明)を用いた場合、被使役者の意志を無視して、無理やりある行動を遂行させようとする強制使役的状况を表す。

(7) ɲua⁴³ ne⁴³ kaŋ⁵¹ ɲua⁴³ khyɔ²¹ ni⁴⁴ puɔŋ⁴³ liu⁴⁴ ɔ²⁴⁴

我 妮 □ 我 去 日本 留学。

1SG 母 CAUS 1SG 行く 日本 留学 「母は私を日本へ留学させた。」

指示使役では、被使役者の意志が問題視されない。行動の遂行を拒む場合を明示するには、そのような語句を付加しなければならない。しかし、(7)のような強制使役の状況では、そのような語句がなくても、「私が日本へ留学したくない」という意志が暗示される。

3. “共”を用いた使役構文の使用状況

2節では、指示使役、容認使役、強制使役について略述した。これらの使役構文はすべて「使役者+使役標識+被使役者+VP」の構造をとる。その際、被使役者がある動作・行為を遂行する状況で、各々の標識によって使役者がいかに関わるのかを示している。事態の遂行者は被使役者である。しかし、次のような状況では、動作主は被使役者ではなく、使役者となる。例えば、「子供に服を着せる」や「(倒れている)おじいさんを起こす」のような状況においては、次のように表現する。

¹ /kaŋ⁵¹/ “□” は動詞としての用法はなく、強制使役以外の表現も現在見つかっていない。

(8) ɲua⁴³ kœŋ⁴² lian⁴⁴ŋɔ⁵¹ sɔ⁴² i⁴⁴iœŋ⁴⁴

我 共 佢囡哥 颂 衣裳。

1SG CAUS 子供 着る 服 「私は子供に服を着せる。」

(9) i⁵¹ kœŋ⁴² i⁴⁴pa²¹ ho⁵¹ lian

伊 共 依伯 扶 □

3SG CAUS お年寄り 起こす上がる 「彼はおじいさんを起こした。」

(8)の構文を見ると、上記の使役構文と同じ構造で表現している。しかし、この文には、上記のいずれの標識も用いることが出来ない。代わりに“共”を用いている。(8)は子供が自力で服を着ることが出来ない状況である。そのため、第三者である「私」が直接手を加えることによって、子供が服を着るという状況を引き起こしている。(8)の“我”は使役者のみならず、同時に動作主でもある。

(9)においても同様である。動作対象の「おじいさん」が自力で立ち上がれなくて、立ち上がるように第三者「彼」が力を貸して起こしたという状況である。このときの「おじいさん」にも動作主性がほとんど認められない。

このように、“共”は動作対象かつ被使役者を標示し、使役構文を構成することが可能である。では、なぜ“共”が使役構文の標識になりうるのか。4節でその理由を簡単に説明してみたい。

4. “共”について

“共”は「共にする」という動詞である。しかし、動詞としての用法は極めて少ない。(10)は子供の会話によくみられる。(11)は「子供の世話をする」という意味の文である。

(10) ɲua⁴³ kœŋ⁴² ly⁴³

我 共 汝

1SG 共にする 2SG 「あなたと友達になる。」

(11) kœŋ⁴² ŋian⁴³

共 囡

共にする 子供 「子供の世話をする。」

動詞としての“共”が構成する動詞句に、さらにほかの要素が後続し、“共”が前置詞として使われるようになった。その際に、“共”が同伴者、並立関係²、動作の相手、ないし受益者などを標示する標識としても用いられる。そして、“共”が使役の標識になりえたのは、動作の相手、受益

² 同伴者及び並立関係を表す例は以下のように示す。

ɲua⁴³ kœŋ⁴² siu²¹miŋ³⁵ khyɔ²¹ hu⁴⁴tshian⁵¹ 「同伴者」

我 共 小明 去 福清

1SG COM 人名 行く 地名

「私は小明と福清へ行く。」

ɲua⁴³ kœŋ⁴² siu²¹miŋ³⁵ se⁴² ka²⁴⁴ tun⁴⁴ho²⁴⁴ 「並立関係」

我 共 小明 是 □ 同学

1SG COM 人名 である 同級生

「私と小明は同級生である。」

者を表す機能から、さらに文法化したからであると考えられる。

- (12) siu²¹min³⁵ kœŋ⁴² i⁵¹ a⁴⁴ muai²¹ sœŋ³⁵ma²¹
 小明 共 伊 阿 妹 双骂
 人名 COM 3SG PREF 妹 口喧嘩する 「小明は妹と喧嘩した。」
- (13) ŋua⁴³ kœŋ⁴² siu²¹min³⁵ pha²¹ tieŋ⁴⁴ŋua⁴²
 我 共 小明 拍 電話
 1SG COM 人名 掛ける 電話
 「私は小明に電話を掛ける。 / 私は小明の代わりに電話を掛ける。」

(12)では、“共”は単に動作の相手を標示する。しかし、(13)では、電話を掛ける相手という解釈に加えて、「小明の代わりに電話を掛ける」という解釈が可能である。つまり、「小明」は動作の対象であると同時に、授与対象でもある。このような解釈になるには、動作対象は動作主性が低いものでなければならない。(13)で言えば、「小明が自身では電話を掛けられないか、またはそのような状況にある」ことが想定される。

“共”は動作主性の低い対象を標識することが出来ることから、動作対象が動作を受け、ある状態を引き起こされる表現にも使用される。

- (14) lian³⁵ŋɔ⁵¹ kian⁵¹ o
 佢囡哥 惊 去
 子供 びっくりする ASP 「子供がびっくりした。」
- (15) siu²¹min³⁵ kœŋ⁴² lian³⁵ŋɔ⁵¹ tsɔ²¹ kian⁵¹ o
 小明 共 佢囡哥 做 惊 去
 人名 CAUS 子供 する びっくりする ASP 「小明は子供をびっくりさせた。」

(14)は「子供がびっくりする」を意味する自動詞文である。(15)はその状態に関与した動作主「小明」及び原因となる動作“做”が明示される。そして、状態の主体である「子供」が“共”によって標示されている。動作主の動作・行為によって「びっくりする」という状態を引き起こされた表現である。(15)における動作対象「子供」は状態の主体であり、動作主性が認められない。

このように、“共”を用いた授与構文において、授与対象にある状態を与えるということから、その状態を引き起こさせるという使役の解釈が生じた。

さらに、“共”を用いた使役構文においては、被使役者が無生物でも可能である。

- (16) ly⁴³ kuŋ⁴⁴koŋ⁴² kœŋ⁴² i⁵¹ p^huo⁴⁴ lian
 汝 棍棍 共 伊 扶 □
 2SG 棒 CAUS 3SG 起こす上がる 「君、棒を立たせなさい。」

ただし、被使役者が無生物の場合では、前方に移動しなければならない。その際に、それは“共”の後ではなく、前に置かれる、“共”の後では3人称代名詞/i⁵¹/“伊”が置かれる。“伊”は“棍棍”のことを指示している。(15)における被使役者が話題化される場合でも、“共”の前に置かれる。その際にも、“共”の後に3人称代名詞/i⁵¹/“伊”が置かれる。そして“伊”が指示しているのも被使役者である。以下の(17)のように示す。

- (17) siu²¹min³⁵ lian³⁵ŋo⁵¹ kœŋ⁴² i⁵¹ tso²¹ kian⁵¹ o
 小明 佢囡哥 共 伊 做 惊 去
 人名 子供 CAUS 3SG する びっくりする ASP 「小明は子供をびっくりさせた。」

5. まとめと今後の課題

本発表は福清方言の使役表現について、その構造を記述した。初歩的な考察を通してではあるが、以下の3点が明らかになった。

1. 福清方言では、使役構文は「使役者+使役標識+被使役者+VP(動詞句)」のような構文を取る。使役標識の差異により解釈が異なる。具体的には、以下のようになる。
 /kœ²¹/ “叫”、/hau⁴³/ “吼” →指示使役
 /lyœŋ⁴²/ “让”、/tɔ⁴⁴/ “掏” →容認使役
 /kaŋ⁵¹/ “□” →強制使役
2. “共”を用いた使役構文では、使役者が動作主と同一人物である。被使役者にある動作・行為を引き起こさせるのではなく、ある状態を引き起こさせることを表す。これは他の使役構文と異なる。
3. “共”が文法化の後、同伴者、動作の相手、ないし受益者などを標示する多機能性を持つ標識になる。このうち、授与表現から、さらに授与対象にある状態を引き起こさせる状況を表すようになり、新たに使役を表す機能を獲得した。

しかし、“共”を用いた使役構文と“掏”を用いた使役構文との関連性については、まったく触れることが出来なかった。“掏”と“共”は使役表現における振る舞いは異なるものの、同じ授与表現からきていることにおいては共通している。今後、両者の関連性及び授与表現と使役構文とのつながり性について、より精緻な調査と考察をし、記述していきたい。

参考文献：

- 冯爱珍(1993)《福清方言研究》北京：社会科学文献出版社
 木村英樹(2003)「中国語のヴォイス」『月刊 言語』32-4, pp.64-69
 佐々木勲人(2002)「中国語における使役と受益—比較方言文法の観点から—」筑波大学現代言語学研究会[編]『事象と言語形式』東京：三修社